

岐阜・柿田遺跡

1 所在地

岐阜県可児市大字柿田字前山・孫六・杉坪・

月田・三字古・三次子・六ノ坪・稲垣・尻無・

池尻・甫田上、可児郡御嵩町大字顔戸字三次子・

尻無

2 調査期間

一九九九年（平11）五月～継続中

3 発掘機関

（財）岐阜県文化財保護センター

4 調査担当者

藤岡比呂志・野村元次・近藤大典ほか

5 遺跡の種類

集落跡・水田跡

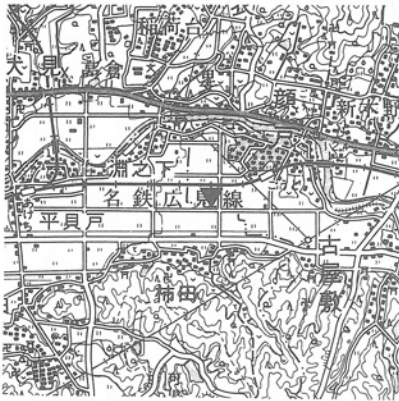
6 遺跡の年代

弥生時代～中世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

柿田遺跡は、「柿田条里」

として周知され、近年まで良好に遺存していた条里地割内に所在する。ここに東海環状自動車道の建設が予定され、まず柿田遺跡の北側に所在する顔戸南遺跡

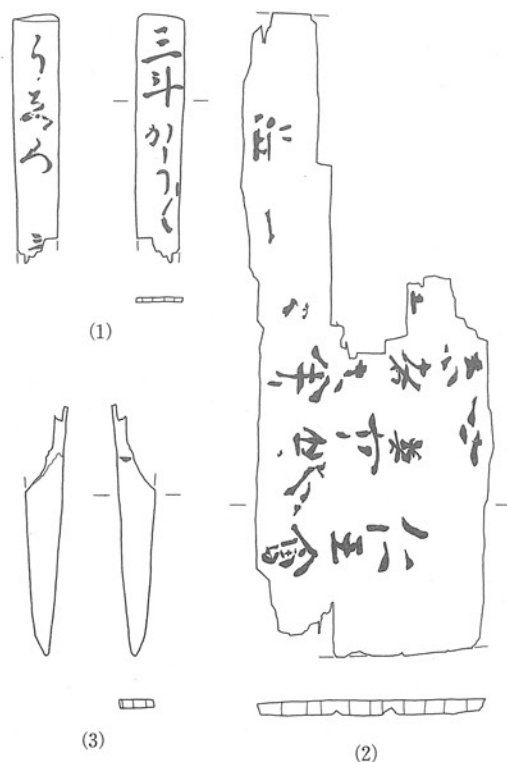


（美濃加茂）

を調査し、弥生時代末から古墳時代中期にかけての集落跡・灌漑施設や、古代にさかのぼる条里の坪境と考えられる道路状遺構などを検出した。続いて顔戸南遺跡の南側で、インターチェンジの建設予定地として柿田遺跡の発掘を行なうこととなり、一九九九年から約八万㎡におよぶ範囲の調査を継続して実施している。

これまでに判明した遺跡の概要は次の通りである。①弥生時代から古墳時代後期にかけての集落とそれに隣接する流路。②古代の溝や流路と条里の坪境に造られた道路状遺構。溝や流路からは、大量の須恵器とともに七・八世紀の人形・馬形などの形代、「美濃国」刻印須恵器などが出土している。③中世の建物群数カ所と溝や流路。④中世後期以降の水田面。この水田面は古代以来の地割を継承し、その上に造られていたこと、それが近年まで残存していた景観の基礎となったことがわかった。また各時期の流路内からは、堰や堤の基礎となった木組を検出し、同時に農耕具や建築部材などの木製品も大量に出土した。

木簡は、一三世紀前半に埋没したと考えられる溝から出土した。溝は、ほぼ条里地割に則って区画の北・東・南方を方形にめぐるように掘削されており、現状で最大幅は約二m深さは〇・七mで、東西は約七〇m、南北は断続的に検出しており、復原すると約七〇mにおよぶ。溝の東北角と東南角を確認しているが、北溝は西で南に曲がらず西溝はなかった。南溝は東南角から数mにわたって検出し

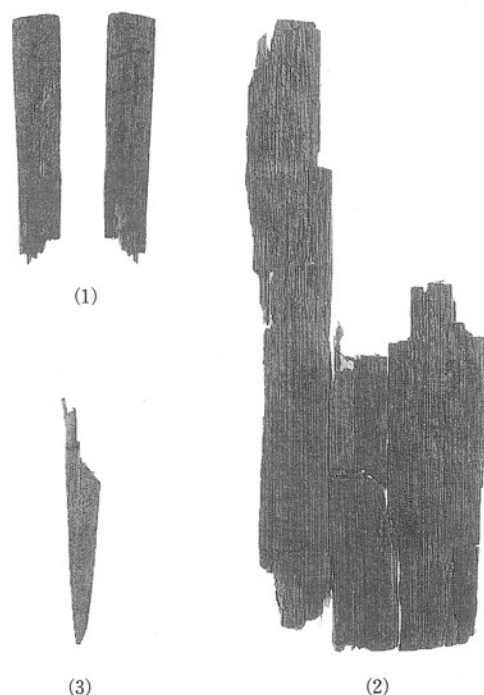


大で四文字程度想定できる。したがって、一行六―七字で六行にわたり文字が記されたと復原できると思われる。

さて、木簡の性格であるが、「仁王会」という書き出しや「善根」「奉」などから仏教との関わりが明らかである。遺跡の性格もあわせ考えると、木簡は、法会を行なった際、その旨と功德を願って僧に書いてもらう「巻数」にあたる可能性がある。

(3)は形状から付札木簡と考えられる。

この他、墨痕のある小片が二点ほど出土しているが、肉眼観察か



ら(2)の木簡と同一個体と思われる。
現在、遺跡は調査中であり、また遺物の整理作業も始まったばかりである。それらの成果や、また明知庄関係史料などとあわせ、今後さらに検討していきたいと思う。

なお、木簡の検討にあたっては、奈良大学の寺崎保広氏・山形県立米沢女子短期大学の三上喜孝氏・皇学館大学の渡辺寛氏のご教示を得た。

(近藤大典)